

アメリカン・ハードボイルド 小鷹信光 編

The
American
Hard-boiled
7

Michael
Brett

マイケル・ブレット
沢万里子／訳

デス・トリップ

*Dead,
Upstairs
in the Tub*



アメリカン・ハードボイルド 小鷹信光 編

The
American
Hard-boiled
7

マイケル・ブレット
沢万里子／訳

デス・トリップ

*Dead,
Upstairs
in the Tub*

5 書房新社

Michael Brett :

DEAD, UPSTAIRS IN THE TUB (1967)

アメリカン・ハードボイルド 7

デス・トリップ © 1985 Printed in Japan

1985 年 3 月 20 日 初版印刷

1985 年 3 月 29 日 初版発行

著 者 マイケル・ブレット

訳 者 沢万里子

装幀者 渋谷育由

装 画 トム・マッコイ

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話 (03)404-8611〔編集〕(03)404-1201〔営業〕

振替 東京 0-10802

印 刷 暁印刷株式会社

製 本 小高製本工業株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります。

ISBN4-309-72407-0

デ
ス
・
ト
リ
ッ
プ

主な登場人物

チャールトン・リグビー	若い妻に逃げられた老人
ピーター・マクグラス	ニューヨークの私立探偵
エレイン・ファーンノール	マクグラスの昔のガールフレンド
ベヴァリー・ハルショール	モデル。エレインのルームメイト
ウォリス・ヴァーノン	男前のモデル。ベヴァリーの友だち
ヘクリーン・シューズン	こと
リチャード・アダムズ	前科者
クリフォード・ハモンド	〃
ポーラ・スパナー	売春婦
アリス・グリーンリーフ	主婦
リー・ボイデン	借金取立て人
ジョイス・ビーヴァー	レジ係の女
J・B・ボラード	大富豪
ダニエル・ファウラー	殺人課の警部
ホーガン	部下

依頼人の名前はチャールトン・リグビー、女房に逃げられた老人だった。愛する妻を見つけたし、すぐに連れ戻してほしい、という。彼女は月だ、太陽だ、メインの磯浜だ、大西洋の青海原だ。そんなたわごとを爺さんは並べたてた。妻を愛している、彼女なしでは生きていけない。彼女のいない人生など味気なくてとても耐えられない、生きていたって意味はない。と、まあ、こんなぐあいだった。

この手の話なら耳にタコができるほど聞いてきた。が、へ私立探偵ピーター・マクグラスとドアに表札を掲げているならおとなしく耳を貸さなきゃならない。それでメシを食っているんだから。身長六フィート三インチ、体重約二百二十ポンド、髪は黒、目は青。そんな男を思い浮かべてくれ。よし、それがおれ、ピーター・マクグラスだ。昔、黒髪の美女がこういつてくれた。あなたって聞き上手ね、みるからに卑しい顔をしているわ。彼女はこの顔にぞくぞくきたらしい。卑しい顔

をした男にしびれるんだそうだ。が、そんなことはどうでもいい。本題は、行方不明の女房の件をおれがどうするのか知ってたがっている爺さんのことだ。

リグビーはいう。「それで、いなくなつたワイフの件はどうしてくれるのかね？　ワイフを捜して、家に帰るよう説得してほしいのだ」

チャールトン・リグビーは七十代に達し、頭髮は真っ白になっている。動作はきびきびして、身なりもきちんとしていた。当然、細君も同じくらいの歳だろう。だとすると、うまくなだめて連れ戻すのはむずかしそうだ。おそらく細君は、道に迷つたとしてもおれには話すだろう。子供はいるのかリグビーに訊いた。子供たちなら母親の居所を知っているかもしれない。子供はいないという返事だった。いたとしても彼らに訊いてみてもはじまらない、ということだ。

おれはメモ帳と鉛筆を取り出した。「わかりました、ミスタ・リグビー。で、奥さんのお名前は？」

「バーバラ、バーバラ、バーバラ」

と、こんなぐあいにリグビーは三回繰り返した。まるで細君に呼びかけているか、妙な調べにのせて名前を口ずさんでいるかのようだった。とにかくそれはとても心をあたたくして、心を揺さぶる響きがあった。

「ミスタ・リグビー、詳しい話を聞かせてください。どうして奥さんは家を出たのです？　奥さんがいないのに気づいたのはいつ？　わたしが知っておくべきことをすべて話してください」

「話すといつてもたいてないんだが。あれは一週間前だった。わしはゴルフ場から帰った。その日の午後、十一番ホールまでやったところで雨が降りだして、帰ったのだ。家に戻ってみると、書き置きがあった」

リグビーはそれをおれに渡した。そこにはきれいな手書きでこう書かれていた。

愛するチャールトンへ

どうかわたしを捜さないで。わたしたちはもう終わりなのよ。これ以上もう耐えられないの。

バーバラ

「奥さんはどこにいますか、ミスタ・リグビー？」

「それがわかっておいたら、ここにこうしておるものか。とくに自分で見つけておる。わかつてくれ、気楽にこうしてきみのところまで来たわけじゃない。きまり悪いことこの上なしだ」

「わかります」とおれはいった。実際、彼の気持ちにはよくわかった。おれは振り出しに戻った。

「ミスタ・リグビー、奥さんが家を出た理由に心当たりは？」

「もちろん、あるとも」財布から一枚の写真を取り出したチャールトン・リグビーは、それにじっと見入り、そして悲しそうにかぶりを振った。「悪いのはわしのほうだ。いまになってそれがわかった。彼女にやさしくなかった。思いやりがなかったのだ」

リグビーの手から写真を取り、そこに写る女を凝視した。すらりと長い脚をした若いブロード女がストライプのビキニ姿で見事な肢体をさらけだしていた。

「これが、奥さん？」おれは口をあぐりさせて訊いた。

そうだ、とリグビーはきっぱりいった。なぜ彼女を見つけたしてすぐに連れ戻してほしいのか、これでようやくわかった。

おれはバーバラを見つめた。「信じられません。彼女にやさしくなかっただって？ いったい、どんなふうに？」

「セックスに関してだ」リグビーは静かにいった。

「なるほど」そういつておれはうなずいた。こういった件は引き受けないことにしている。この女ならベッドで亭主を殺しかねない。このチャールトンならあっさり昇天してしまうだろう。いかにも品のよさそうな老紳士だ。おれはバーバラを食い入るように見た。年齢は二十三歳ぐらいか。おれがバーバラを家に連れ戻したら、彼女はチャールトンを死なせてしまうだろう。間接的にはおれが殺したことになる、この先ずっと罪悪感にさいなまれることになるのだ。そんなことをだれが望む？

要は彼の気持ちをおれに傷つけないようにするかだった。そこでいった。「ミスタ・リグビー、あなたと奥さんのあいだにはかなりの年齢差があるようですが」

「歳か」リグビーはじれったそうにいった。「歳がなんだ？ ただの数字じゃないか。しあわせな

気持ちでいられれば、だれだって若いのだ。ふたりでいっしょにいるときはわしはいつでももしあわせだった。彼女は月だ、太陽だ……」

「ええ、わかります」とおれは遮った。「ミスタ・リグビー、失礼ですがおいくつですか？」

「七十五だ、いまが最高だ」

「バーバラは若い娘です」おれは教えてやった。脱線しかけた話をうまく元に戻した。

「わかっておる。だから結婚したのだ」彼はあっさりいった。「いいかね、きみ、わしがなぜ彼女と結婚したと思う？」

「なぜって、家のなかに若い娘がいるのはいいいもんでしょう？」

「確かにそのとおりだ。もちろん、そういうこともある。しかし、若い娘と結婚した第一の理由は、わしが人並はずれた精力家だからだ。七十に手が届くと、あっちのほうがいちだんと強くなつてな。わしは医学的にも記録に値する珍しい例だそうだ。論文にも何度が取り上げられた。そこで、きみに手を貸してもらいたいわけだ。彼女を捜しだしてくれ。見つけたら、これからはあっちのほうは手加減すると伝えてほしい。どういうことかバーバラにはわかるはずだ」

チャールトン・リグビーは窓の外を見つめ、自分が払う犠牲を考えてか暗い顔になった。

おれの頭はおかしくなりそうだ。それとも好色爺さんがおれを焚きつけようとしているのか。どっちにしてもいふべき言葉はなかった。

リグビーは前にかがみ込んでささやいた。「土曜と日曜は休みにしてもいいと伝えてくれんか。」

そういうだけでいい。これだから近頃の女は！」そういつて鼻を鳴らした。「昔はこうじゃなかった。わしにはバーバラの前に四人の妻がいた」

そのとき電話が鳴りでしたが、おれは無視した。いまいましい。受話器を取ろうとしなかった。「四人の前夫人はどうになりました？」おれは訊いた。

「みんな出て行った。ひとりにつきだいたい十年はもったな。ひとりの女を味わい尽くすのにそれぐらいはかかる。かわいそうに、みんなばててしまつてな。しかし、この五番目は——まだ六か月しかたつておらんのだ」

おれはただあつけにとられて坐っていた。電話はやかましく鳴りつづけた。原則として、退け時にかかつてきた電話は無視することになっている。夕方の電話はろくなものじゃない。そのことはとうの昔に学んでいる。が、こんどばかりは受話器を取った。

「ハロー」

相手は女だった。「ビート？　わたし、エレインよ」

「エレイン？」

「わたしの声がわからないの？　別れたとたんに忘れちゃったのね？」

思い出したときには遅すぎた。「エレインか。すまん、接続が悪かったもんで」

「どうかしたの、ビート？　あわててるみたいだけど」

「いや、そんなことはないさ」

エレイン・ファーンノールはおれの昔のガールフレンドだ。ファッション・モデルをやっていて、一時間に百ドルは楽に稼ぐ。洗練された大人の女。知性と教養にあふれ、それでいてあいきょうもある。もちろん美人だ。

彼女とは遊びとしてつき合うようになり、短いあいだだったが楽しく過ごした。そして最後はなんの後くされもなく、きれいに別れた。

あれはおれがエレインの部屋にころがり込んでしまった。彼女は自分自身のことをすっかり打ち明けてくれた。学生結婚をして、夫が車を盗んで留置場にぶち込まれると、エレインは二十歳で離婚した。彼女の夢は、金持ちと結婚して仕事をやめ、あとは死ぬまで日なたに寝そべって暮らすことだった。

一か月もたつと、エレインはだしぬけに結婚してくれといいはじめた。それはなにも予想外のことではなかった。いくら遊びと割り切っている、女が腹を決めればいちかばちか賭ける気になるものだ。女の心の隅っこには、結婚指輪や郊外の家、子供たち、一週間分の買物、PTAなどがちらつく。そして通勤電車に大急ぎで向かう夫の姿も。ロングアイランド鉄道に私立探偵が乗っているなんていう話を聞いたことがあるかい？ 通勤電車など場違いもいいところだ。糊のきいた真っ白なワイシャツを着て、イギリス仕立てのレインコートとブリーフケースを持った男たちのなかに放り込まれたら、おれは窒息してしまう。

さいわいエレインはわかってくれた。結婚の夢に賭けて、負けたわけだ。よくあることさ。本当

のところは、つき合いはじめた頃エレインが実際はどう思っていたのかおれにはわからなかった、ということだ。

簡単に話せばそういうことになる。それだけのことなんだ、と何度も自分にいい聞かせていれば、そのうち本当にそう思い込むようになるだろう。おれは彼女が好きだった。エレインといっしょにいるときに見いだしたぬくもりとやさしさにはいつも感謝している。いまは友だち同士だが、おれたちの友情は変わらない。

おれはリグビーを見やった。彼のような手合いはさっさとお引き取り願うに限る。さいわいエレインが都合のよいときに電話をかけてくれた。

「で、身代金を要求する手紙を残していきましたか？」おれは送話口に向かっていった。

「ビート、わたしはまじめなのよ。あなたに会わなければ」

「残した！　で、いくら要求しています？」

「ビート、ふざけないでちょうだい。どうかしたの？」

「あなたはいまどこに？」

「わたしの部屋よ。よかったら、これからうかがうわ。忙しければ、帰りに立ち寄ってもらってもいいけど」

「ええ、もちろんです」おれはいった。「こみいった事情はよくわかります。安心してください、知っていることは絶対に口外しません」

「ビート、いったいどうしたっていうの？　わたしはふざけているんじゃないわ。だれかがわたしの部屋に忍び込もうとしているの」

「じゃ、すぐうかがいます。十五分以内にそちらに着くでしょう。彼らはそれほど遠くには行っていないと思います」

「ビート、なにかあるのね」

「わかりました。あなたはそこでじっとしていてください。なにがあっても部屋から出ないように。そしてドアの鍵をしっかりかけておくんです」

「ビート、なにが——」

エレインがいつている途中でおれは電話を切り、リグビーに向き直った。

「いまの電話の話を聞きになったと思いますが」

「なにかいってやったな」とリグビーはぼかんとしていった。

「誘拐です。あなたの奥さんを見つけたすなどとてもできません。この件にかかりきりになりそうです。深刻なんですよ、とても深刻です」

「どうやってウィフを捜しましたらいいんだ？　こっちだって深刻だぞ」

「ニューヨーク・タイムズに尋ね人の広告をだしたらいいかです」

リグビーはぱちんと指を鳴らした。「なるほど、いい考えだ。そいつは思いつかなかった。で、どうでしたらいいんだ？」

「こんなふうなんです。バーバラ、帰っておくれ、週末は休みにするから」

「それでうまくいかなかったら、そのときは？」

「そのときは別の探偵社にあたることです。職業別電話帳にでていますから」

リグビーは葉巻に火をつけ、紫煙をくゆらせ、そして顔をしかめた。

「探偵社も昔はこんなじゃなかった」そういつて彼は出て行った。

それが一日の終わりの合図だった。おれは留守番電話サーヴィスに電話をして、帰宅することを伝えた。もし重要な電話があったら六時頃に自宅に連絡してほしい、と係の女の子に頼んだ。この一週間を振り返ってみれば、はたしてそんな電話がかかってくるかどうか。近頃は大きな仕事などまったくなかった。景気はさっぱりだ。月曜日は小魚さえかかってこない一日だった。火曜日は電話を盗聴してほしいという男がひとり。水曜日には女房の素行調査を頼む男。そして木曜日にはその男の女房がやって来て、言動のおかしい夫を尾行してほしいといってきた。そんな一週間だった。おれはエレイン・ファアノールに会いに行った。彼女が住む六十四丁目の褐色砂岩のアパートメントは、間口の狭い三階建ての建物で、ちょうど砂を吹きつけて化粧直しをしているところだった。くすんだ黒に白い窓枠が映えている。一階に通じる石の階段は取り払われて、いまは赤いエナメル塗装のドアが通りと同じ高さにあった。

入口でエレインの表札の下にあるボタンを押した。インターホンから彼女の返事が聞こえた。「ピートだ」送話口に向かっておれはいった。電動ブザーの音がして、内側のドアのロックがはず

れた。取っ手を回してドアを押すと、三階まで上がり、エレインのドアをたたいた。

ドアをあけたエレインは無理に微笑んでみせ、うやうやしく頬にキスをしてくれた。「入って、ピート。またあなたと会えてうれしいわ」

「おれもだよ」そう答えておれはエレインをなめまわすように見た。それだけの価値がある女だ。エレイン・ファーノール、二十六歳。卵形のかわいい顔、なめらかな肌、茶色の大きな目。豊かな黒髪は片方の肩に流している。小さな金のイアリングがかわいらしい耳を飾っていた。背が高く、痩せているが、出るべきところはちゃんと出ている。突き出た胸にくびれたウエスト、そしてしなやかな腰。その腰をおれは知っている。おれは立ったまま賞賛のまなざしで見っていた。細身仕立ての黒いスラックスと袖なしのジャージーを着たエレインに昔の思い出がよみがえってきた。しかし、もう終わってしまったことだ。そこで、彼女の顔に視線を上げた。

おれたちはともに昔を思い出していた。

「さあ、なかに、ピート」エレインはいった。「そんなところにつっ立っていないで」

そこは小さな三部屋の住居で、雑誌や本はきちんと片づけられ、居間の敷き物はきれいに掃除機がかけられて、こぢんまりした部屋にふさわしくすべてすっきり収まっている。

エレインは黙ったままおれを見つめた。彼女もおれがここにいたときのことを考えているのだろうか。

「なにか飲む、ピート？」飲み物も勧めていないことにはっと気づいたらしい。なにを相談するに

してもそれはしばらく後回しだ。「スコッチのオンザロックはどう？」

「いいね」おれは答えた。

スコッチをおれに持つてくると、エレインは寝椅子に乗りあがって体を丸めた。彼女は決して酒はやらない。いつもオレンジ・ジュースをちびちび飲むくちだ。

「ビート、誘拐とか身代金の要求とか、電話で話していたわごとはなんなの？ あれはいつたいなに？ あなた、酔っているんじゃないかと思ったわ」

「七十五歳の爺さんが、ベッドで少しも休ませてくれないからといって逃げ出した二十三歳のワイフを見つけたしてくれ、といってきたのさ。まいった、まいった」

「嘘だわ、そんなばかな」信じられないという顔だった。

「ああ、ほんの冗談さ。そんなことが本当にあつてたまるか」彼女を納得させようとしたところでなんになる？ 「ところで、だれかがきみのところに押し入ろうとしているだって？」

「ゆうべは眠れなかったわ。眠れない夜っていうのがあるでしょ。きのうは写真家のエリク・ペダーソンにいまいましい思いをしたの。彼のことは前に話したと思うけど」

おれはうなずいた。「きみが完全に頭のイカれた男と呼んでいたやつだろ」

「そう、そいつ。わたしは四時間もライトに照らされっぱなしで、ぐったりして家に帰ると、熱いお風呂に入って、九時にベッドにもぐったの。そして三時に目が覚め、一時間ほどなんとかもう一度眠ろうとしたんだけど、だめだった。で、おなかになにか入れば寝つけるかもしれないと思